

「O」

Cover Story

WHOによって「懸念される変異株 (VOC)」の5番目として指定されたのが、2021年11月24日に南アフリカから報告されたオミクロン (ギリシャ文字: O) 株である。「O」について正しい知識を持つことは大切なことなので、限られた紙面で概観してみる。

オミクロン株はその表面にあるスパイクタンパクが私たちの細胞表面にある受容体と親和性が高いため、細胞へ侵入を容易に許してしまうらしい。英国保健安全保障庁によれば、英国で家族内感染を追跡した研究により、接触者に伝播する確率がデルタ感染者からは約10%であったのに対し、オミクロン感染者からは18%であるということが報告されている (UK Health Security Agency, 17. dec. 2021)。

オミクロン株による症状については、無症状～肺炎を起こしての死亡までとさまざまだが、次の点で通常の新型コロナの感染症と異なる可能性がある (沖縄県での50症例から)。すなわち、

■主訴が、発熱 (72%) ・咳 (58%) ・だるさ (50%) ・のどの痛み (44%) などの風邪症状

■潜伏期間が短い? (3日程度←従来は5日)

重症化リスクについては、「オミクロン感染者はデルタ感染者より、病院にかかるリスクが20～25%、一晚以上入院するリスクは40～45%低い」という報告がある (Imperial College London, 22. dec. 2021)。その理由として、オミクロン株が、デルタ株や通常株に対して上気道 (気管支) 内で速く増殖し、肺内での増殖は相対的に非常に遅い可能性が考えられる。

ワクチンの有効性については、3回接種の有効性が認められるが (UK Health Security Agency, 23. dec. 2021)、臨床例が少ないため、具体的な効果の数値化には今少し時間がかかる。治療薬についても中和抗体薬、増殖抑制薬、過剰な免疫反応や炎症の抑制薬などが開発中だが、増殖抑制薬 (ルヌピラビル、レムデシビル) への期待は大きい。

日本国内でもオミクロン株感染者は急増の一途を辿っている。しかし、これまで通り、不織布マスク着用、手指消毒・うがい、3密回避などの感染対策を継続していくことで、自分はもちろん、家族を含めた周囲の人を守ることができる。

これからも引き続き感染予防に努め、一日も早く、いつもの生活が戻ってくることを期待したい。

(Miyhashi)

「幸運の豚」

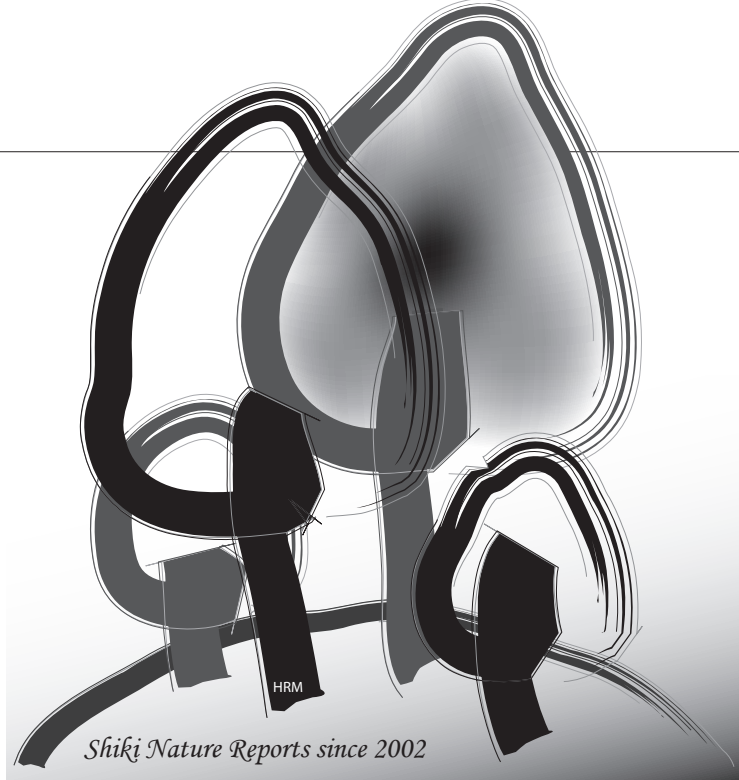
Frohes Neues Jahr! あけましておめでとうございます。皆さんは年末年始、ゆっくり休めましたでしょうか? 今回はドイツの新年の習慣について、ちょっとご紹介したいと思います。

最近、岡山県の国道で豚が動けなくなったニュースがありましたが、ドイツ人が聞いたらさぞ心を痛めただろうな、と思いました。というのも、豚はドイツでは幸運をもたらす動物として親しまれており、12月28日頃から1月3日頃までマジパンやチョコレートで作られた「Glücksschwein (幸運の豚)」を大切な人に送る習慣があるためです。ドイツでは、豚は新年に向けた幸運を持ってくると言われているため、新年や旅立ちの際には豚グッズを贈ると喜ばれます。

ドイツ語には豚に関することわざもあり、例えば「Schwein haben (直訳: 豚を持っている)」は「思わぬ幸運を拾う」という意味です。その起源は中世にまで遡り、当時行われていた弓の競技で、優勝者には馬が最下位には豚が贈られていました。「成績は最下位だったけど、豚がもらえたから良かった」ということで、豚が幸運のシンボルとなりました (クラウン独和辞典より)。

日本語ではネガティブなイメージで使われることもある「豚」ですが、国が変わると全く逆の意味を持つこともある、というご紹介でした。皆さんも、今年は既存のイメージに囚われず、少し視点を変えて何かチャレンジしてみたいはいかがでしょうか?

(Kurita)

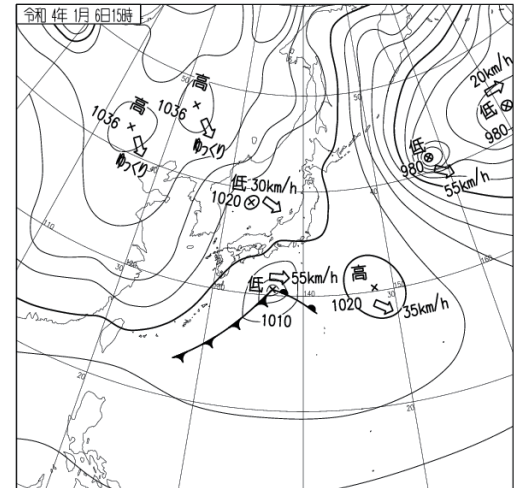


関東南部では1月6日の午後に雪が降りました。志木校も積雪で斜路を通れない日が続きましたね。日陰の雪はいつまでも氷になって残っていました。

暦の上では1月5日に「寒の入り」、二十四節気では「小寒」。この後20日に「大寒」、2月3日が「節分」で2月4日「立春」と暦の上では春になります。日脚も日に日に伸び着々と春に向かっていますが、まだおよそ一か月は「寒」が続きます。

さて、6日の雪は天気図にあるように、日本の南岸を通過した低気圧によるものでした。立春前後、関東地方をはじめ太平洋側に雪をもたらす典型的なパターンです。これは昨年末にあったような西高東低の冬型がゆるんだときに起こります。寒の真っ只中のこの時期に南岸低気圧はちょっと早いかな？と思ってしまいます。

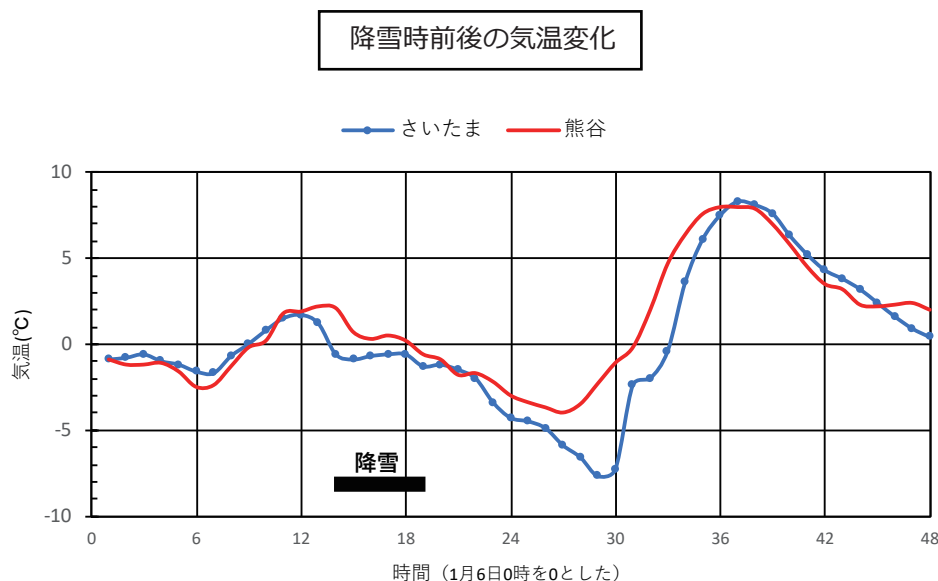
雨になるのか雪になるのか？じつは天気の詳細の中でも、南岸低気圧の雨雪判断は最も難しい問題です。低気圧が岸に近いと南風が入るので雨、岸から遠いと降水がない、つまり雪は降らない。その絶妙な低気圧の進路と発達具合がかみ合ったときに雪になります。さらに雪質は水分をしっかりと含んだ「ぼた雪」で、一般的に関東の雪は10ミリの降水で10センチの積雪といいます。実際、東京のアメダスデータを確認すると、降水6.5ミリ、積雪10センチでした。6.5ミリの雨なら何もないですが、10センチの雪が積もるとあの大騒ぎです。



2022年1月6日15時の天気図
太平洋側の南岸を低気圧が進んでいる。

一つ言えることは、南岸低気圧の降雪は南部ほど降りやすいということです。東京都心では10センチの積雪でしたが、さいたま市では2センチ、埼玉県北部の熊谷市では0センチでした。当日、私は卓球の大会があって熊谷ドームにいましたが、午後2時ごろ外に出てみると、雪が舞いはじめたところでした。群馬の雪山には太陽が当たっていました。

6日、雪が降ったのは数時間で夜のはじめには止まりました。夜半には空は晴れ、星が瞬いていました。そのせいか夜はかなり冷えしました。さいたまのアメダスでは翌7日午前5:40に氷点下8.2℃を記録しています。これはおそらく近年の中でもかなりの低温だと思います。風向きが弱いながらも北に変わったこと、晴れて放射冷却が効いたことが原因ではないでしょうか。



細部は省略されているのにちゃんとシロクマらしい、そんな大理石のシロクマをメインビジュアルにしたチラシに惹かれて、去年の3月、目黒区美術館で開催されていた展覧会「前田利為—春雨に真珠をみた人」を訪れた。展覧会の主人公、前田利為（1885-1942）は旧加賀藩主前田家の第16代当主。ちょうど3年生日本史の3期試験範囲の時代を生きた人だ。分家の出身だが、15代当主利嗣には男子がなかったため、その死の直前、長女漢子と将来結婚することを条件に利嗣の養子になり、15歳で宗家当主となった。陸軍軍人として要職を歴任し、太平洋戦争開戦後の1942年、ボルネオ守備軍司令官として現地に赴任。同年、飛行機事故で死去。士官学校で同期の東条英機とは仲が悪かったらしいが、築地本願寺で行なわれた陸軍葬では、時に首相兼陸相だった東条も弔辞を読んでいる。

「春雨に真珠をみた人」とは、利為が蜘蛛の巣についた雨粒を写真に収め、そのアルバム台紙に「綾真珠」と記したことに由来する副題。展覧会はそんな利為の美意識に注目し、その美術コレクションを紹介するものだった。利為は生涯に4度渡欧していて、現地で古今の西洋美術を見ている。1回目（1913-16）の留学時には、ドレスデンの美術館で見たラファエロなどへの感動を日記に記し、3回目（1920-23）、パリに出張した際は、仕事（第一次大戦後の平和条約実施委員として国境画定などに参与）の合間に欧州各地を旅行、美術館を訪れるだけでなく、作品を購入したり、自身と妻の肖像画を描かせたりしている。4回目（1927-30）は駐英大使館附武官としてロンドンに赴任。1929年にフランスの彫刻家フランソワ・ポンポンのアトリエを訪れ、大理石の《シロクマ》とブロンズの《バン》を注文している。これが冒頭のシロクマである。

フランソワ・ポンポン（1855-1933）は、パリの動物園で動物たちを観察し、古代エジプト美術などにも学んで、洗練された新しい動物彫刻を生み出した彫刻家。若い頃から様々な彫刻家の工房で働くも、1922年に発表した実物大の《シロクマ》が注目されて、ようやく自身の作品が高く評価されるようになった。時に67歳。人気になったシロクマは、ブロンズ、大理石など材質も大きさも様々なものが多数作られた。そうして有名になったシロクマを利為もほしがったのだろう。

ポンポンは4冊の会計帳を残しており、その1冊に1929年11月、「前田侯爵」がアトリエを訪れ、《シロクマ》と《バン》購入の契約を結んだことが、ちゃんと記録されている。

ちょうどいま、そのポンポンの日本初の回顧展が群馬県立館林美術館で開催されている（1月26日まで。2月には千葉の佐倉市美術館に巡回）。パリのオルセー美術館が所蔵する《ワシミミズク》など、フランスからも作品を借りているが、展示作品の多くは館林美術館所蔵のもの。先の会計帳も館林が所蔵していて、あわせて展示されている（展示箇所は別だが、当該ページも写真で紹介）。個人的には《シロクマ》よりも《ほろほろ鳥》や《フクロウ》、《カラス》などブロンズの鳥たちが気に入った。ポンポンはニコラと名付けた鳩を飼っていたそうなので、鳥も好きだったのだろう。感染者が急増する中で遠出は勧めにくいけど、展覧会は一期一会。状況が許せば、加賀の殿様も手元に置いたモダンな動物たちに、ぜひ会いに行ってみよう。



お茶畑でもないこの学校にチャノキ（日本茶の元となる茶葉の木）がある、という不思議だろうか。ここから狭山茶の茶処まで直線で15km程度。本校から10kmも離れていない所沢市の「三富新田（これが何かは2・3年生の地学選択者に聞いてください）」では隣地との境界にチャノキを植えた。チャノキは身近な木だったのである。もともと、熱帯～亜熱帯原産なため、霜に弱い。茶畑でよく見かける謎の扇風機はその名も「防霜ファン」という。ツバキ科のこの木は、10月から12月にかけて白い花を咲かせ、茶色い硬い実をつける。

この木が厄介なのは木そのものではなく、茶葉を主食とする「チャドクガ」の幼虫（毛虫）である。この毛虫の毛（針）は、脱皮殻であっても強い炎症を起こす。そうなった場合は皮膚科に直行し、ステロイド剤を処方してもらう以外策がない。

[2021年9月～2022年1月までの開花情報]

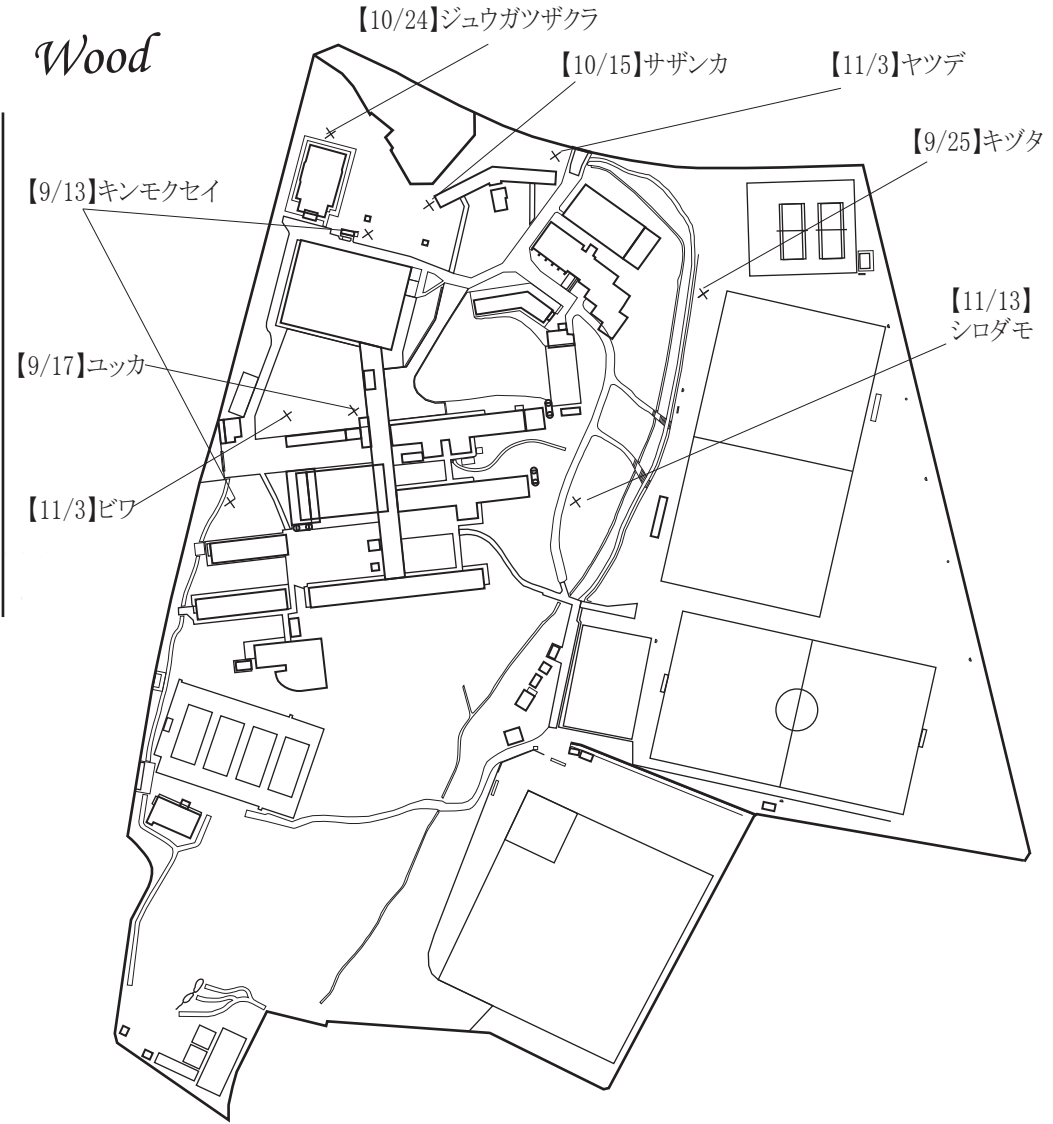
Grass

- 17. Sep ヒガンバナ(白・赤),カナムグラ,チヂミザサ,ヒメジソ
- 25. Sep ノブキ,ヤブマメ,コセンダングサ
- 5. Oct ヌスビトハギ, ホトギス, セイタカアワダチソウ
- 15. Oct オオブタクサ
- 24. Oct ススキ,セイバンモロコシ
- 30. Nov オオイヌノフグリ,ミドリハコベ
- 16. Dec ニホンズイセン,アメリカフウロ,ホトケノザ



【チャノキ】
ツバキ科ツバキ属

Wood



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術	原 浩史 (Hara)
	動物	栗田 くり菜 (Kurita)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	編集・植物画	荒巻 知子 (Aramaki)